

英語教育における英語学[†]

浅野 一郎*

宇都宮大学教育学部*

英語教育の場で役に立つ新しい英語学・言語学の知識は何かを検討する。今回は、語(Word)、句(Phrase)以外の中間的まとまりを認める \bar{X} 理論の知見、伝統文法より広い前置詞の概念を認める根拠、その英語教育上の有用性を論じる。

キーワード：学校文法，英語科教育法，英語学， \bar{X} 理論と学校文法，生成文法における前置詞，主要部

1. 句の内部構造の重要性 (\bar{X} 理論の知見)

1.1 名詞句の階層構造

「英語教育における英語学1」¹⁾において、英語教育における、句(Phrase)という概念の重要性を指摘した。その際、英語で句の存在を認める根拠として、句が一つのまとまりとして振る舞うことを述べた。

例えば、(1)においては、名詞句(NP) *that young man with long hair* というまとまりが、人称代名詞 *he* で言い換えられている。

(1) When I saw [_{NP} *that young man with long hair*], *he* was talking with a tall man at a bus stop.

(2)では前置詞句(PP) *at the station* が *there* によって言い換えられている。

(2) We arrived [_{PP} *at the station*] ten minutes earlier than they arrived *there*.

(3)においては、動詞句(VP) *open the window* が1つのまとまりとして削除されている。

(3) I tried to [*open the window*], but I couldn't \emptyset .

(4)では、2番目の等位節において、VP *help them* が前置されている。

(4) I've promised to [_{VP} *help them*], and *help them* I will.

もし、言い換え、移動などの適用を受けるものがまとまりを成す語の連鎖だとするならば、まとまりを成すものは、NP, PP, VP のような句に限られない。句の内部にも中間的まとまりがあるとする証拠がある。²⁾ (句より大きいまとまりとして、いくつかの句が集まった節(Clause)があるが、ここでは句より小さいまとまりを問題にする。)

次の例文の *one* は NP 全体を指すのではない。

(5) This fish isn't as big as the *one* I caught.³⁾

また、*one* が指すものは、(6)では Prime Minister of Japan であることが指すように、必ずしも主要部(Head)の語に限られるわけではない。

(6) The present Prime Minister of Japan is less popular than the last *one*.

NP 構造における、語(Word)と句の間の中間

[†] Ichiro ASANO* : English Linguistics in English Language Teaching 2.

* Faculty of Education, Utsunomiya University

的まとまりを \bar{X} 理論では、 \bar{N} (エヌバー)または N' (エヌプライム)であらわす。

(6') The present [N' Prime Minister of Japan] is less popular than the last *one*.

N' を導入することによって、「*one* で言い換えられるのは N' というまとまりを成す部分である」と定義できる。

また、次の例は前置修飾語 (Prenominal Modifier) が付くことで、 N' が階層を成していることを示している。

(7) I like this [N' red [N' cover of the book]] more than that *one*. (*one* は曖昧。)

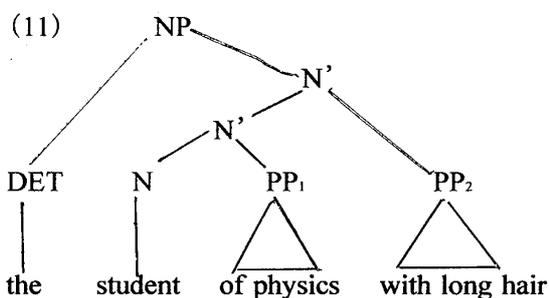
(8)-(10)の例からは、*one(s)* が指すのは N' であるように見える。

(8) The [N' student of physics] with long hair is smarter than the *one* with short hair.

(9) *The [N student] of physics is smarter than the *one* of English.

(10) *I'm looking for [NP travel guides]: do you sell *ones*?⁴⁾

\bar{X} 理論では、(11)の構造で PP_1 の機能を補部 (Complement), PP_2 の機能を付加詞 (Adjunct) として区別する。したがって、代用形 *one* は、(9)の非文法性が示すように、補部の PP を伴ってはいけないものと思われてきた。



しかし、Huddleston and Pullum. 2002, p. 1516 が示次の例はこの反例となる。

(12)i. This proof of Taylor's theorem is better than the one of Parzival's inequality.

ii. The production of Madame Butterfly was

better than the one of Tosca.

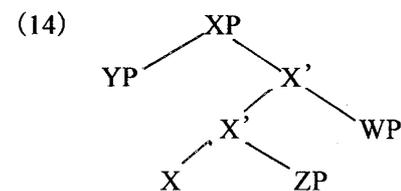
これらの例の *of*-句は意味的には補部であるが、*one* を修飾する。*one* の先行詞の定義は再考を要する。⁵⁾

N' がまとまりである証拠は、*one(s)* の先行詞以外にもある。次の例は、 N' が等位接続構造の等位項となっている例である。

(13) The [N' prisoner's boyfriend] and [N' father of her child] is in prison for dishonesty.⁶⁾

1.2 色々な句の間の共通性

\bar{X} 理論が捉えるのは NP 内の中間的まとまりだけではない。 X の値として N, V, Adj, P を設定し、それぞれの語の最大投射 (Projection) が、 NP, VP, AP (形容詞句), PP であるとするので、構造の共通性を説明できると主張する。これらの句構造の共通性は次の一般的枠組みで表される。



ZP を補部、 WP を付加詞と呼ぶのは、 NP の構造に関して述べたとおりである。 YP は指定部 (Specifier) と呼ばれる。指定部は主要部に一定の制限を加える働きを持つ。 NP では限定詞、 VP における副詞、 PP, AP における程度表現などである。⁷⁾

NP の場合と同様に、 VP 内のまとまり V' を認める根拠として、次の諸例がある。⁸⁾

(15) John will [VP buy the book on Tuesday], and Bill will *do so* as well.

(16) John will [VP [V' buy the book] on Tuesday], and Paul will *do so* on Tuesday.

(15)の *do so* の先行詞は VP であるが、(16)では、 V' である。

補部と付加詞の違いには、受身構文に関する相違がある。一般に付加詞内の名詞句は受動文の主語になりにくい。⁹⁾

(17) [_{NP} This job] needs to be worked [at ___] by an expert.

(18)*[This office] is worked [at ___] by a lot of people.

次に AP の構造を見てみよう。

AP 内の補部の例としては、(19)の [_{PP} of music] が挙げられる。

(19) John is [_{AP} very [_{A'} fond [_{PP} of music]]].

また、Radford. 1988 は、AP 内の付加詞の例として、(20)における [_{PP} in some ways] を挙げる。

(20) John is [_{AP} [_{A'} fond [of Mary]] [_{PP} in some ways]]

[_{PP} in some ways] が AP 内にある証拠として、(21)のように、AP がまとまりとして前置される事実を指摘している。

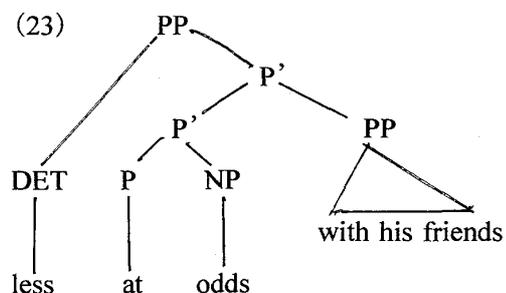
(21) [_{AP} Fond of Mary in some ways] though he is, he doesn't really love her.¹⁰⁾

また、(22)は代用形 *so* が A' を指すことを示している。

(22) John used to be [_{AP} very [_{A'} fond of Mary]], but now he is much less so.¹¹⁾

最後に、PP 内の階層構造を示す例としては、Radford. 1988 が次の諸例を挙げる。¹²⁾

(23)は [_{PP} less at odds with his friends] の階層構造を示す。



[at odds] も [at odds with his friends] も、共に P' である証拠として、代用形 *so* が、(24) (25)

のように、どちらをも指し得るという事実がある。

(24) I know that he's [at odds] with his colleagues, but he is less *so* with his friends.

(25) I know that he always used to be [at odds with his friends], but he is less *so* these days.

さらに、(26)における副詞 *completely* が P' を修飾するものとする、(26)は、(27)と(28)の2通りの構造を持つ可能性がある、という。

(26) He is completely at odds with his friends.

(27) He is [_{PP} [_{P'} completely [_{P'} at odds]] [_{PP} with his friends]].

(28) He is [_{PP} completely [_{P'} [_{P'} at odds] [_{PP} with his friends]]].

(27)の構造を持つ証拠としては、(29)のような文の存在があり、(28)の構造を持つ証拠としては、(30)のような文の存在を指摘する。

(29) He's slightly [at odds] with his colleagues, but completely *so* with his friends.

(30) He used to be only slightly [at odds with his friends], but now he's completely *so*.

また、*completely* が付加詞として P' を後置修飾する位置が、(31) (32)のように2カ所あることも、この構造分析を支持している。

(31) He is [at odds] completely with his friends.

(32) He is [at odds with his friends] completely.

以上、句の内部にもまとまりがあり、それが様々な振る舞いを決定することを見てきたが、 \bar{X} 理論が捉える句構造の性質として、もう一つ、重要な事実がある。

英語と日本語の句構造において、主要部と補部の前後関係が句の種類ごとにバラバラとはならず、英語は主要部先端であり、日本語は主要部終端となっていることが、(14)の枠組みによって捉えられている。「英語教育における英語学1」¹⁾において言及した、(33)のような鏡像関係を説明する場合、 \bar{X} 理論の視点が有用であ

ろう。

(33) 日本語	英語
O V	V O
後置詞	前置詞
節+接続詞	接続詞+節
本動詞+助動詞	助動詞+本動詞
関係節+先行詞	先行詞+関係節

2. “前置詞”の概念の拡張について

学校文法が依拠する伝統文法においては、(また普通の辞書も,) *before*, *after*, *since* の範疇として、従属接続詞、前置詞、副詞の3種類を認める。

次例で、[a] は接続詞、[b] は前置詞、[c] は副詞の、各用例である。

- (34) a. Please drop me a line *before* you come.
b. She arrived there *before* noon.
c. I had been there *before*.
- (35) a. She left him *after* he struck her.
b. Will you be there *after* lunch?
c. They lived happily ever *after*.
- (36) a. I've known him ever *since* he was a child.
b. I haven't heard from him *since* my last letter.
c. He went to America in 1950 and has lived there ever *since*.

これに対して、Emonds. 1976, pp. 172-176 は、目的語を取れる範疇が(ほとんど) V と P に限られるという、動詞と前置詞の類似性に着目する。目的語を取る典型的な動詞に限らず、節を目的語とする動詞や、目的語を取らない動詞も動詞と見なすのなら、従属接続詞や(形容詞からの派生でない)副詞を前置詞と見なせるのではないかと主張する。

動詞は、目的語として名詞句を取るもの[_ NP] (いわゆる他動詞)、節を取るもの[_ S]、目的語を取らないもの[_ ∅] (いわゆる

自動詞)に下位分類される。

同様に、従来の目的語を取る[_ NP]前置詞の他に、従属接続詞を‘節を取る[_ S]前置詞’、副詞を‘目的語のない[_ ∅]前置詞’と下位分類し、それらの振る舞いの類似性の根拠とする。¹³⁾

伝統文法と違い、X理論などの新言語学では、前置詞は句の主要部と見なされる。主要部には補部の種類を決定する性質がある。

Huddleston and Pullum. 2002 の文法書もこの点に着目する。

“前置詞の種類によって、認可(license)する補部の種類が違う”という。¹⁴⁾

- (37) a. The magician emerged *from* [PP behind the curtain].
b. I didn't know about it *until* [AdvP recently].
c. We can't agree *on* [S whether we should call in the police].
d. They took me *for* [AP dead].

from は PP を、*until* は AdvP を、*on* は疑問節を、*for* は AP を、取ることができる。

for には、(38)の例のように、補部が目的語の場合[a]と、述詞(Predicative)の場合[b]とがある。

- (38) a. She bought it *for* [a friend].
b. She took him *for* [a friend].

これは、(39)の動詞補部の場合と平行である。

- (39) a. She *consulted* [a friend].
b. She *considered* him [a friend].

Huddleston and Pullum. 2002 は、従来、従属接続詞とされていたものを、*if*, *whether*, *that* を除いて、前置詞に分類する。

また、*before*, *after*, *since* や、*in*, *on*, *over*, *under*, *up* のように、目的語を取る典型的な前置詞用法を持つ副詞に限らず、目的語を取り得ない多くの副詞をも、前置詞と見なす。

それらには、場所・空間概念の *here, there, where* や、時間概念の *now, then, when* も含まれる。

このような新たな知見は、従来、従属接続詞、前置詞、副詞という分類によって隠されていた振る舞いの共通性に気づかせてくれるという意味で、英語教育にも意味を持つと思われる。

(40)-(42) は修飾語に関する共通性を示す。

(40) a. He'd left [*two hours* [before the end]].

b. He'd left [*two hours* [before]].

(41) a. She went [*straight* [inside the house]].

b. She went [*straight* [inside]].

(42) a. I've got a terrible pain [just [here]].¹⁵⁾

b. The bullet entered [just [under his heart]].¹⁶⁾

日本人の学生は、(拡張された概念としての)前置詞の補部には比較的によく注意するが、指定部に出現する修飾語にはあまり注意しないのではないかと思われる。

学生が、*before long* “ほどなく”と *long before* “ずっと以前”をよく間違えるのはそのせいであろう。

共通教育英語のテストで(43)の英文和訳を出題した。

(43) A team of divers retrieved the body of a drowned man from a pool of water about ninety feet below the fall.

52名の学生の解答のうち、34が誤訳で、その内訳は、「プールの90フィート下のくぼみ」(1人)、「プールへ約90フィートのところ」(2人)、「90フィートの滝の滝つぼ」(17人)、「90フィート下の滝の水たまり」(3人)、「水深90フィートのプール」(10人)である。最後の誤訳は、*below the falls*を“水面下”と誤訳したものと見なして除外しても、24例が前置詞句の指定部の解釈ミスによると推定される。¹⁶⁾

日英語の相違点の中で、(33)のような鏡像を成す相違点はかなり学習されていると思われる

が、上述のような相違点をうまく学習させる工夫も必要である。

X理論などの新言語学の知見のうまい活用方法の考案が待たれる。

注

¹⁾ 浅野一郎. 2006, pp. 487-492.

²⁾ 代用形による言い換えや削除規則の詳細は、今西・浅野. 1990を参照。

³⁾ Huddleston and Pullum. 2002, p. 1513より。

⁴⁾ Huddleston and Pullum. 2002, p. 1515より。

Huddleston and Pullumは(10)の非文法性の説明として、“oneは先行詞が *elaboration* を含むことを要求する”という。

⁵⁾ Huddleston and Pullum. 2002, p. 1516. は、oneが補部の前置詞句によって後置修飾され得ないのは、次のような名詞が先行詞の名詞の場合である、という。

i Role nouns: *boss, friend, dean, king*

ii Nouns denoting a part-whole relationship:
cover, leg, sleeve

iii Kinship nouns: *mother, father, sister*

iv Agent nominalisation: *designer, students, supporter*

⁶⁾ Haegeman and Guéron. 1999, p. 77より。

⁷⁾ Radford. 1988は、NPの指定部の例として、限定詞の他、*more/less* :

i. He shows [_{NP} *more/less* [_{NP} *indulgence to Mary*]] than he should do.

APの指定部の例として、*very* :

ii. He was *very* kind to Mary.

や、*as, so, how, quite, too*などを挙げている。

⁸⁾ Radford. 1988, p. 234より。

⁹⁾ Radford. 1988, p. 233より。

¹⁰⁾ Radford. 1988, p. 244より。

¹¹⁾ Radford. 1988, p. 243より。

^{1 2)} Radford. 1988, pp. 248-250 より。

^{1 3)} 浅野一郎. 1997 では、従属接続詞、前置詞、副詞の *before*, *after*, *since* の文中の出現箇所、補部、修飾部などに関してコーパスを使い、それぞれの特徴を調査した。

^{1 4)} Huddleston and Pullum. 2002, p. 599.

^{1 5)} Huddleston and Pullum. 2002, p. 1549.

^{1 6)} 『新編英和活用大辞典』(EPWING CD-ROM 版) 研究社.

^{1 7)} 浅野一郎. 1996, p. 182.

Transformational grammar: A First Course.
Cambridge: Cambridge univ. Press.

参考文献

浅野一郎. 1996. 「英文誤訳の英語学的検討」

『教育実践総合センター紀要』第 19 号,
pp. 180-187. 宇都宮大学教育学部附属教育実践
総合センター.

浅野一郎. 1997. 「Brown 大学言語資料における
after, *before*, *since* の分布調査について(中間報
告)」『宇都宮大学教育学部紀要』第 47 号,
pp. 9-20. 宇都宮大学教育学部.

浅野一郎. 2006. 「英語教育における英語学 1」
『教育実践総合センター紀要』第 29 号,
pp. 487-492. 宇都宮大学教育学部附属教育実践
総合センター.

Emonds, Joseph E. 1976.

*A Transformational Approach to English Syntax:
Root, Structure-Preserving, and Local Trans-
formations.* New York: Academic Press.

Haegeman, L. and J. Guéron. 1999.

English Grammar: A Generative Perspective.
Oxford: Blackwell.

Huddleston, Rodney and G. K. Pullum. 2002.

*The Cambridge Grammar of the English
Language.* Cambridge: Cambridge Univ. Press.

今西典子・浅野一郎. 1990. 『照応と削除』(新
英文法選書第 11 巻) 東京: 大修館

Radford, Andrew. 1988.